１．靖国神社の霊璽簿について

　靖国神社の御祭神二百四十六万余は一柱一柱、きちんと名票が確認されており、ただ多くの霊を誰だか分からない　　けれども漠然と祀っている訳ではない。 従って無名戦士の霊とは異なるのである。神殿の霊璽簿に一柱づつ氏名が記されている。

　連隊本部の書記として戦没者関係の業務に携わっていた私は昭和１９年１月頃、この霊璽簿を書いた記憶がある。　それまでの問に戦死した戦没者のうち、戦死が確認された三名か四名の名前を一人づつ短冊形の紙に毛筆で書いたと思う。

　連隊本部や中隊指揮班の事務室には、書類を清書する達筆な兵が集められており、これを筆耕と呼んでいた。彼らに書くよう命じていたら、甲木准尉から「自分で精魂を込めて書くんだ」と言われ、更に「軍司令部から少なくとも二三回の書き直しを命ぜられる筈だ」と言われた。「靖国神社に祀る神聖なものだから念には念を入れて書くように」とのことだろうと、丁寧に書いて提出した。北支では師団司令部から何回も書き直しを命ぜられた様である。

　しかしニューギニアでそんな悠長なことが出来る筈がない。この霊璽簿を書いたのはこの時が最初で、また最後であった。それ以後は熊本の留守部隊に於いて書かれたものと思う。

２．靖国神社と、その由来、護国神社について

靖国神社について

　靖国神社については「憲法の政教分離の規定に反している」として内閣総理大臣の靖国神社参拝をめぐり、損害賠償を求める訴訟が各地の地方裁判所で起こっており、また中国や韓国の「Ａ級戦犯合祀反対」の圧力による政治問題により、Ａ級戦

犯即ち東条元総理ら十四柱の昭和殉難者の分祀の問題や、靖国神社に代わる国立追悼施設を建設するという構想までもちあがっている。
　総理大臣の靖国神社参拝については、中曽根首相が中国の圧力に屈して参拝を中止して以来、１６年間にわたり総理の参拝は無かったが、平成１３年８月１３日の小泉純一郎総理の参拝によって１６年振りに総理の参拝が実現した。しかし中国や韓国の内政干渉ともいえる圧力は絶えず、政府が「戦没者を追悼して平和を祈念する日」と定めた８月１５日の参拝が中断しているのは誠に遺憾であり、国難に殉じた英霊に対して誠に申し訳ないことである。

　「中心となるのは英霊であって、国や宗教のメンツが優先してはいけない。靖国神
社の問題でも、そこを考えたいところである」天台座主 山田恵諦（日経新聞）

　靖国神社の由来
　明治維新に当たって、国事に奔走して殉死した志士や、戊辰戦争などで戦死した人々を含めて、明治２年６月、明治天皇の御内意を受けて、大村益次郎などが九段坂の上に創建して、東京招魂祉と称したのが始まりである。これを同１２年に靖国神社と改称して、別格官幣社となった。西南の役、日清日露の大戦をはじめ北清事変、第１次世界大戦、満州、支那事変、大東亜戦争に至るまでに戦没した英霊を祀っている。
　終戦後には占領軍の指令により、維持管理の形態は変わったが、その本質は変わっていない。世界各国においても戦争に際して、無名戦士の墓や記念碑が立っており、一般国民の感謝崇拝の念を集めているのと同様である。
　明治初期の内外情勢は、わが国にとって容易なものではなく、政肘当局は新国家建設に心胆を砕いた。封建幕政から近代国家に移行するに当たって、これを打開する基本理念として提唱したのが「富国強兵」であった。これを実現するためには国のために命を捧た先人たちの功績と犠牲を顕彰して、永くこれを継承することが必要であった。このような経緯をもって靖国神社は創建され、今に至っている。

　護国神社について

　護国神社は戦没者などの霊を祭った神社で、神奈川県を除く各都道府県に少なくとも一か所、全国に計五十二社がある。明治維新前後につくられたものが多く、靖

国神社（東京）の地方分祉として位置づけられた。第 2 次世界大戦後は独立の宗教法人として一部を除き神社本庁に所属している。組織的には靖国神社と分かれたが、全国護国神社会の事務局が靖国神社にあるなど、関係の探さは変わっていない。毎年の例大祭の呼び方や実施時期などは神社によって適うが、各神社は「祭神に由緒が深く、最も大切な日として靖国神社の例祭に合わせて行うことが多い。

因みに靖国神社の祭神が戦没者の霊璽簿であるのに対し、護国神社では県内の戦没者の名簿を祀っているようである

３．千鳥が淵戦役者墓苑について

千鳥が淵戦没者墓苑は昭和３４年３月に建設された、国立の「無名戦没者の墓」である。現在この墓苑には先の大戦の間に海外で亡くなられた戦没者の御遺骨のうち、ご遺族にお渡しできなかった約三十五万柱のご遺骨が納められている。

竣工当時は「六角堂」中央の陶棺に各戦域の遺骨が象徴的に納められるとともに、大部分の遺骨はその下に造られた納骨堂に奉安された。

しかしその後、「六角堂」の地下納骨堂の余裕が少なくなったため、平成３年に、「六角堂」の奥正面の地下部分に納骨堂が造られ、更に平成１２年にこれが拡大増設された。その後、この「増設納骨堂」について、遺族等からいろいろな意見が出されたので、厚生省及び環境省は、国立の納骨施設としてより良いものとするため、六角堂と増設納骨堂の一体感や、墓苑全体の環境を統一するなどの改修工事を行い、平成１５年３月に完成した。毎年５月の厚生労働省主催の追悼式では、新たに収集奉還されたご遺骨の納骨の儀式が行われ、また１０月には秋期慰霊祭が執り行われる。この式典には皇族殿下をはじめ、内閣総理大臣ほか政府要人、ご遺族などが参列する。

この墓苑の地域には、明治１０年、閑院宮載仁親王邸が新築され、後に皇族方が住まわれた。また墓苑敷地西側部分には、明治天皇の初代侍従長徳大寺公爵邸や内大臣の邸などがあったが、これらの御殿は昭和２０年の空襲により焼失し、昭和３４年に墓苑が建設されるまで此処は焼野原であった。

また墓苑の北隣りには、侍従長官邸があり、昭和１１年の二・二六事件で、侍従長鈴木貫太郎海軍大将が安藤大尉率いる部隊の襲撃を受け、重傷を負った現場である。

さらにこの周辺は幕末から明治初期にかけて、国事に奔走した志士や政治家たちにとって由緒ある地域でもある。

また千鳥が淵の桜は有名で、毎年数十万人の花見客で賑おう所である。この桜は、千代田区によって昭和３２年ごろに植えられた染井吉野で、その数は１３０本に及んでいる。これらの桜は、それから４０数年を経た今日、一抱え以上の大樹の並木となり、それぞれ言うに言われぬ風格を具えて、大きな枝を濠の方に伸ばしている姿が実に美しい。対岸のお濠の法面に植えられた１５０本の桜と相まって、千鳥が淵のお濠は正に桜で埋め尽くされる。また仄かなぼんぼりに照らしだされる夜桜は更に見事で夜桜見物の人出で賑やかである。

４．「留魂砂」趣意書

＜戦場は悲惨にして、遺骨も遺髪も収容しえず、無限の恨みを残したり。

ガダルカナル最後の日、水色鮮やかなる海岸の真砂をすくう。
英霊よ天下りて、サンゴ美しき海岸の妙にこもり給え。
我等はこの砂を奉じ、ふるさとの父母に見参し奉らん＞

（これは第十七軍がガダルカナルを撤退する時に採取した海岸の砂を、戦没者の遺骨の代わりに「白木の箱」に納め、添えて遺族に届けられた趣意書である）

東部ニューギニア長崎戦友会の私共は毎年、長崎県護国神社の春季例大祭と、秋の大村忠霊塔における長崎県戦没者追悼式に参加しておりますが、式典終了後ニューギニアで採取した砂を、ご遺族にお配りしてきました。式典に参加されたご遺族が喜んで、掌を合わせ拝むようにして持ち帰る姿を見て、「国から渡された白木の箱には何が入っていたのだろう」と痛恨の思いであった。東部ニューギニア戦末期の戦没者のご遺骨の殆どが帰国してないと思う。ご遺骨の箱には「開けないように」と注意書きが添えてあったと聞く、せめて上記ガダルカナルの様な「趣意書」でも添えてあったら、ご遺族も慰められたであろうにと思うと残念でならない。

私は部隊の戦没者名簿を繰るたびに、駐屯地や宿営地で戦没した者は別として、戦争末期の移動中に落伍した兵（当時は遅留兵と呼んでいた）の死亡場所や死亡月

日が何を根拠に記載されたのか、果たして正確なのか疑問に思うことがある。当時連隊本部で戦没者関係の業務に携わっていただけに、その患いを深くするのである。

負け知らずだった北支での戦闘や、上陸直後の東部ニューギニア作戦では、部下や戦友の戦死を確認して報告できる者が必ずいたものである。しかし戦況が苛烈になり体力も極度に衰えた転進中に、看取る者もなく山野に骨を晒した英霊たちの命日が、正確に分かる筈がない。戦場での報告や、戦死公報には推測によるものが多かったのではないか。当時の政府は戦死の公報にも随分手間取り、遺族への通知も遅れたのであろう。終戦後に第十八軍の残務整理班（伊豆の伊東で作業していた）にも遺族からの問い合わせが殺到した様である。終戦の八月十五日を迎えるたびに英霊の無念さやご遺族の悲憤を思うと胸の痛みを覚える。